

新たな都市活力推進特別委員会行政視察概要

1 視察月日 令和5年11月15日（水）～11月16日（木）

2 視察先及び視察事項

（1）徳島県徳島市

阿波おどり会館における観光振興及びにぎわい創出等に関する取組について

（2）一般社団法人そらの郷（徳島県三好市）

にし阿波の土地を生かした観光振興による地域づくり推進について

3 視察委員

副委員長 齊 藤 達 也

委 員 川 口 広

委 員 清 水 富 雄

委 員 瀬之間 康 浩

委 員 福 地 茂

視察概要

1 視察先

徳島県徳島市

2 視察月日

11月15日（水）

3 対応者

徳島市経済部にぎわい交流課課長補佐（受け入れ挨拶・説明）

阿波おどり会館館長（説明）

4 視察内容

（1）阿波おどり会館における観光振興及びにぎわい創出等に関する取組について

ア 阿波おどり会館の施設概要

徳島市のキーコンテンツである阿波おどりは400年を超える歴史を持ち、徳島が世界に誇る伝統芸能の一つである。毎年8月12日から15日の4日間に祭りが開催されており、国内外から年間100万人を超える観光客が訪れる等、日本有数のイベントとしても知られている。

阿波おどり会館（以下「会館」という。）は、徳島市が世界に誇る阿波おどりを保存・伝承し、阿波おどりのさらなる発展を図るとともに、徳島市の観光振興に資することを目的として平成11年に建設された阿波おどり専門の施設である。最寄りのJR徳島駅から新町川を挟み徒歩約10分の市街地内部に位置しており、宿泊地や飲食街等からも徒歩で移動できる距離にあるため、観光拠点としては集客しやすい好立地に構えている。また、阿波おどりを踊る団体を連と呼び、その一つである阿波の風が会館専属連として所属している。

会館2階の阿波おどりホールでは休館日を除き毎日阿波おどりの公演を行っている。昼公演は阿波の風がおどらなそんな阿波おどりをを行い、夜公演は徳島市の有名連が日替わりで実演しており、毎日おどる阿波おどりと銘を打ち、講演を行っている。また、会館5階には山頂までつながる眉山ロープウェイが設置されており、徳島市の貴重な観光資源である眉山山頂への交通及び観光客等の利便性向上に寄与するなど、地域経済活性化につながる重要な役割を担っ

ている。

イ 徳島市の観光施策及び阿波おどり会館が担うにぎわい創出の役割
徳島市には、阿波おどりや四国遍路など、世界に誇れる固有の伝統文化をはじめ、眉山や新川町等の豊かな自然も含めた観光客にとって魅力ある独自の観光資源が豊富に揃っている。

徳島市では会館を観光の拠点として、眉山や新町川等の地域資源を生かした観光地づくりに取り組んでおり、PR活動や情報発信を積極的に行っている。また、訪日外国人観光客に対する受け入れ環境を整えるため、Wi-Fi環境や観光案内板の多言語表記の整備等を市と各施設等で連携しながら推進している。さらに観光地域づくり法人である徳島市内の Destination Management Organization（以下、「DMO」という。）と連携し、広域的な情報発信、プロモーション事業及び観光地域づくりを行い、市内全体の観光及び経済的な資源を最大限に活用しながら、より効果的な観光振興が実現及び継続できるよう取組を推進している。

また、会館は徳島駅前的大型商業施設アミコビル及び徳島県が整備を進める文化芸術拠点の新ホールと合わせて中心市街地の活性化につながるランドマーク施設と位置付けられている。アフターコロナの観光需要を取り込むために、SNS等を活用した戦略的な情報発信やインバウンドの受け入れ等についても、各施設で相互に協力をしながら、積極的に取り組んでいる。

徳島市総合計画に掲げる施策の一つである観光・交流の促進の中で、会館の魅力向上は重点項目となっている。阿波おどりの保存・伝承・発展に寄与する様々な事業の中心として、会館が発信及び集客の拠点となり、徳島市内に国内外から観光客をより多く誘致することで、地域のにぎわい創出の取組に貢献している。

ウ 質疑概要

Q 映画「眉山」のロケ地による観光及び経済効果はあったのか。

A 観光客数や経済効果としては極端な結果は見られなかったものの、眉山という地名はこの映画の効果で全国的に認知されるようになった。また、映画の内容と相まって大人の観光スポットとして広く知られるようになっている。

Q 昼と夜の公演はそれぞれ1日1回の公演を予定しているのか。

A 昼公演は午前11時、午後2時、午後3時及び午後4時の1日4回、阿波の風により、夜公演は午後8時の定期公演を有名連によ

る日替わりで行っている。

Q 会館3階にある阿波おどりミュージアムの概要と料金について教えてほしい。

A 阿波おどりミュージアムでは阿波おどりの歴史と文化を学ぶことができ、阿波おどりの変遷を分かりやすく理解することができる施設となっている。また、衣装、小道具及び古今の鳴り物等も展示されている。同ミュージアムは開館以降大掛かりな改修は行っていないが、アフターコロナでの需要回復や大阪・関西万博を契機としたインバウンド需要に対応するため、ミュージアムリニューアル事業を進めている。

入場料は一般が300円、小中学生以下は無料となっている。

(2) 委員所見

きわめて強力な観光集客コンテンツである阿波おどりは、真の地域文化となり徳島の土地に根付き、連の方々も誇りをもって取り組んでいることが伺える。

阿波おどり会館での上演も大変すばらしく、地域の連の方々というのは、アマチュアの組織ではあるが、それを全く感じさせないハイクオリティのパフォーマンスを披露していた。これだけの上演レベルを維持できているのは他の連との競争意欲ややりがいがあったのことであり、運営側と演じる側の連携もうまくいっていると感じた。

上演するホールの客席は全席自由席となっており、舞台と座席が近く一緒に踊れる雰囲気と空間が形成されている。上演途中から観客も一緒に踊る場面があり、外国人観光客が喜びながら踊りに参加する様子は非常に印象的であった。大きな目線でのにぎわい創出が謳われる世の中ではあるが、阿波おどり会館で目にできるような人的交流から生まれるにぎわいの創出が、地域振興を支える大事な要素であることを改めて実感させてもらった。

平日にもかかわらず、200人の席がほぼ埋まるほどの盛況ぶりを目の当たりにした。進行役の連の男性が外国人観光客に向けてどこの国から来たのかなど、対話形式で行う進行にも外国人観光客は仕切りに喜んでいた。様々な国から観光目的で来日した外国人観光客が数ある国内観光地から徳島市を選び、この阿波おどり会館に来場している風景に自ら参加できたことで、地元では当たり前の日常が外からは特別な空間になるという視点を学ぶことができた。

本市にも人口建造物であるベイブリッジやランドマークタワー、歴

史的建造物としての赤レンガ倉庫など集客力のある施設もあるが、これに文化的行事を融合させ、世界から集客できるコンテンツとはどのようなものになるのか、真剣に考える機会を得る貴重な視察となった。



(阿波おどり会館 2階の阿波おどりホールにて)

視察概要

1 視察先

一般社団法人そらの郷（徳島県三好市）

2 視察月日

11月16日（木）

3 対応者

常務理事兼事務局長（受け入れ挨拶・説明）

主事（説明）

4 視察内容

（1）にし阿波の土地を生かした観光振興による地域づくり推進について

ア にし阿波と呼ばれる地域の特徴及び主な観光資源

にし阿波とは美馬市、三好市、つるぎ町及び東みよし町の2市2町から構成される徳島県西部の特定地域を指す名称であり、土地面積は約1400平方キロメートル、人口約7万3000人の広大な自然を有するエリアになっている。面積は徳島県の約3分の1を占める一方、人口は県の10分の1であるため、住民一人当たりの面積はかなり広いことになる。

にし阿波の山間部にある集落は険しい山々の中腹に位置し、山、畑、石積み及び家屋等が一体となった景観は日本の原風景として昔から国内で親しまれている。

山間部には剣山、祖谷のかずら橋、大歩危峡及び祖谷峡等の豊富な大自然による観光スポットがあり、徳島市寄りにある美馬市の中心部には脇町うだつの町並みが観光名所として有名で、日本の道100選や都市景観100選等にも軒並み選出されている。うだつとは屋根の両端に設けられた漆喰塗りの防火壁のことを指し、江戸時代中期から昭和初期に建てられた建造物を見学するため、毎年国内外から多くの観光客が足を運んでいる。

イ にし阿波の地域的課題

全国的に進む少子高齢化の影響はにし阿波でも深刻な問題となっており、地域一帯の人口は1980年以降減り続けている。2040年の人口推計では、2010年比でマイナス46%と算出されており、ほぼ半分に等しい人口にまで減少すると見込まれている。自然及び街並みに

ある建造物等、豊富な観光資源を持ち合わせている地域であるにも関わらず、急激に進む人口減少により次の担い手だけではなく、現在の運用にも影響が出る可能性があるという状況になっている。

ウ 地域連携DMOそらの郷による観光地域をつくる取組

にし阿波を新たな観光地域へと刷新する事業である、観光地域づくりプラットフォームの中核を担う組織として、2011年2月に一般社団法人そらの郷が設立された。

そらの郷では2つの柱を掲げて事業を展開している。一つは前身であるそらの郷山里物語協議会の頃から行ってきた教育・研修旅行に伴う農業体験学習、農家への民泊及び体験型観光の開発醸成等、にし阿波の暮らしを生かした農業体験事業であり、二つ目はDMOとして行う観光地域づくりのマーケティングやマネジメント業務、着地型旅行商品の開発及び国内外からの観光客誘致等、観光を通とおした地域振興及びにぎわい創出につながるプロモーション事業である。

にし阿波の地域では、険しい自然環境、伝統農法及び郷土の食文化等地域に息づく山の暮らしを観光客に体感してもらいたいという思いから、地域に息づく千年のかくれんぼ～分け入るごとに、時は遡り～というブランドコンセプトが設定されており、そのコンセプトをもとにそらの郷では、住んでよし・訪れてよしの観光地域づくりを進めている。

プロモーションとして外部に向けて発信するのは交流観光というキーワードであり、用意するほとんどのプログラムには地域住民との交流が取り入れられている。渓谷や急斜面が多いにし阿波は交通が不便なため、観光客にはそこに訪れる明確な理由が必要になる。海外からの観光客にとって、そこでしか出会えない人々との交流及び体験は、観光地選びの理由として上位に位置する魅力の一つであり、プロモーションと併せ、口コミやSNSの影響により、実際にそれを求めて来訪してくる外国人観光客が年々増えている。

そらの郷は2016年に日本版DMO候補法人登録を行い、観光による地域振興事業が高く評価され、翌2017年には地域連携DMOに正式認定された。その後も国土交通省からの地域づくり表彰等の受賞もあったことで、2020年以降、現在では観光庁重点支援DMOの一つに選定されている。

長年の観光圏としての取組を通じ、地域住民・行政・民間企業等

異業種による連携体制を強化してきた観光地域プラットフォームでは、客数や利益を最優先事項とはせず、地域住民の満足度を最も大切にするローカルファーストの考え方を基本としている。一時的な経済効果を狙うのではなく、にし阿波を持続可能な観光地域として残していくために、他の観光地では真似できない、ありのままの生活を観光資源としながら取組を継続している。

エ 質疑概要

Q そらの郷の事業には具体的にどのようなものがあるのか。

A 体験型教育旅行の団体向け事業の展開、三好市内の新たな観光地域づくり、体験プログラムイベントの企画及び実施及び外国人観光客向けツアーの受け入れ等、にし阿波の大自然や日本の原風景に潜在的なニーズを持つ国内外からの観光客に向けた多種多様な取組を実施している。

Q 外国人宿泊者数はどのくらい増えているのか。

A コロナ禍前の数値ではあるが、取組前の2007年と比較して、2019年で33倍の外国人宿泊者数を達成している。実人数としては31,828名の外国人宿泊者を受け入れることができた。徳島県全体における外国人宿泊者数約13万人にも大きく貢献している。

(2) 委員所見

日本の原風景をそのまま観光資源に利用するそらの郷の取組は大変興味深く、外国人にとっても素晴らしい体験になることがよく理解できた。従来のように新たな観光資源を生み出すのではなく、過去からその土地で続けられている日常生活が、外国では経験できない非常に珍しい観光資源へと生まれ変わる可能性があるということ学ぶことができた。

そらの郷では宿泊等の体験コンテンツ以外にも、現地の住民が作る手作り郷土料理を出来立てで食べることができたり、すべてが木の蔭で作られているかずら橋等、ここでしか得られない体験も多岐に渡り用意されている。日本人には当たり前前の食事さえ、インバウンドを呼び込む観光コンテンツになるという捉え方は新たな発見である。

本市においても既存の建築物や豊富な自然を効果的に活用し、市民にとってはありふれた風景でも、旅慣れた外国人観光客にとっては進んで足を運びたいくなるような、横浜ならではの体験型ツーリズムを創造できるのではないかと、大きなヒントを得る視察となった。



(会議室にて説明聴取及び質疑)



(かずら橋にて)